

心理学におけるマンガに関する研究の概観と展望

家 島 明 彦

はじめに

日本において、子どもだけでなく大学生や大人までがマンガを読むようになったということが指摘されて久しいが、現代では大学生や大人が当たり前のようにマンガを読み、大学教授や外務大臣までがマンガを読む時代になった¹。このような現象は、かつて指摘されたような「大学生や大人の墮落ぶり」を示す指標（日本に未熟で幼稚な大人が増えた結果）ではなく、「マンガ作品の成熟ぶり」の指標（マンガの内容・テーマが多様化・複雑化して大人の鑑賞に堪えうるものが増えた結果）として捉えられるようになってきた。依然としてマンガ読者層の中心は少年・少女であることは間違いないであろうが、青年コミックやビジネスマン向けのコミック誌、ミセス向けのコミック誌の存在（とその売り上げ部数）からも、読者層の拡大と内容・テーマの広がり・深まりは想像に難くない。また、マンガの作品数自体も非常に増えており、百花繚乱とも跳梁跋扈とも言えるほど数多のマンガ作品が存在している。マンガの生産量は日本が世界一であり、日本の人気マンガは世界各国の言語に翻訳されて輸出されている。このようにマンガは日本のポップカルチャーとして世界によく知られているため、近年ではマンガを媒介にした文化交流や国際フォーラムといったイベントも盛んに行われている²。

こうした現状を背景に、近年、マンガを対象とした学術的な研究は増加傾向にある。2001年に日本マンガ学会が設立され、学会誌『マンガ研究』が創刊されたこともあり、マンガ研究は量・質ともに確実に右肩上がりを示している。心理学においても、ここ数年、学会でマンガに関するシンポジウムやワークショップが頻繁に行われている³。心理学の領域では、マンガが持っているメディアとして独特な「表現形式」に関連した認知心理学的研究を中心として、国内外で既に幾つかの研究が行われている。しかし、心理学におけるマンガに関する研究論文（学会誌論文や紀要論文）は、マンガに関する（一般向けの）評論や論考に比べ極端に少ない。また、数少ない研究論文も、各心理学領域において乱立している状態であり、未だ体系的にまとめられていない。加えて、心理学においてマンガを扱う意義について論じている研究論文も少ない。

そこで本稿は、以下の3つを目的とする。まず、マンガの現状を整理して報告しつつ、心理学においてマンガを取り上げる必要性を訴える。次に、日本の心理学領域において、マンガに関する研究論文を外観し、どのような先行研究があるか把握すると同時に体系的に示すことを試みる。更に、心理学におけるマンガに関する研究の発展のために、今後の研究の方向性・可能性について展望する。限られた紙面において述べられることは極めて表面的なことに留まるが、これから心理学においてマンガに関する研究を本格的に始めるための叩き台として読んで頂きたい。

1. マンガというメディアについて

心理学におけるマンガに関する研究をレビューするにあたり、まず、マンガについての基本的知識、および、マンガを取り上げる意義を確認しておく必要がある。本来ならばマンガの発展の歴史についても触れるべきであるが、紙面の都合上ここでは詳説できない⁴。尚、本稿での表記が漢字の「漫画」ではなく、カタカナの「マンガ」であるのは、後者が現代における通例であり、ここで扱いたいものが基本的に「ストーリーマンガ」であることとも関係している⁵。マンガの定義も色々あるが、本稿で取り扱うマンガの基本的な定義は、暫定的に「コマを単位とする「絵」とセリフや地の文における「文字」が融合した新たな物語表現形式」（倉田，2003）としておく。

（1）マンガの現状

読者層の拡大

先に述べたように、現代日本では子どもだけでなく大人もマンガを読む。マンガが子ども向けの読み物から発展してきたことは事実であるが、日本ではマンガが独自の発展を遂げ、マンガで育った子どもの中から大人になってもマンガを読み続ける者が現れ、それらに連動して読者層の高年齢化が生じてきた。「大学生はもちろんのこと、大学教師もマンガを読む」（宮原，2001）し、繰り返しになるが、現代はビジネスマンや主婦、有識者までがマンガを読む時代となっている。

ただし、荻野（2001）が指摘するように「マンガ離れ」を経験する人も少なくないと思われる。荻野は少年に比べて少女の方が「マンガ離れ」が早いことを指摘しているが、その後の再帰可能性については言及していない。受験勉強に忙しくなる中学・高校時代に一旦マンガから離れたとしても、大学入学後に再びマンガを手にする人は多いのではないだろうか。筆者のこれまでの調査においても、そのような事例（受験などに伴い一旦マンガを読まなくなった後、再びマンガを読むようになった大学生・大学院生）は少なくない。筆者のように大学生になってから大量のマンガを読むようになった場合もあるだろう。子ども以外の読者層が増えているのは明らかであるが、マンガを読んで育った子どもが大人になるまでずっと継続的にマンガを読み続けているとは限らないことには注意が必要である。また、読者層の拡大は「大人になってもマンガを読むことができる（＝読む余裕がある＆読むに堪えうるマンガがある）現代日本」という特殊なクロノ・トポスと密接に関連していることも忘れてはならない。読者層が拡大し、多くの人がマンガに触れている現代日本において、日本の心理学者がマンガの影響について本格的に取り組むことの意義は少なくないだろう。

量の増加・質の向上

出版科学研究所の調べ（『2006出版指標年報』）によれば、現在、国内で1年間に出版されているマンガ雑誌は300誌以上、単行本は約175ジャンルにのぼり、販売部数は約13億5000万冊にもなる。呉（1997）が指摘するように、「質的な隆盛は量的な隆盛の陰で見えにくい」が、表現技術や作品内容は着実に進歩している。呉が1986年に「表現技術は、ここ20年ほどで飛躍的に進歩し、マンガ以外の例えば文学や映画といったジャンルで表現できてマンガでは表現できないというものはないほどになっている。技術だけではない。表現される内容についても同じことが言える。その範囲は広がり、そして深まっている」と述べてから更に20年の年月を重ねて、「日本のマン

がは、すでに世界に認められているハイレベルの文化だ」(齋藤, 2003)と言われるほどになった。かつて柳内(1964)が「わるいマンガ」として挙げたような「下品な絵」、「子どもの見方・考え方をゆがめる」、「いのちをそまつに扱う」といったマンガがなくなったとは言わないし、今でも跳梁跋扈している可能性は否定できないが、少なくとも優れたマンガ作品が百花繚乱している時代でもあると言えるであろう。これらのことから、一様ではないマンガの影響について心理学が本格的に研究を行うべき時期が来たと見ることができる。

文化としての捉え直し

マンガに対する捉え方も変化してきた。国の文化交流事業にも使われるほどマンガが普及している時代である。かつて子どもに悪影響を及ぼす俗悪な低級娯楽として扱われていたマンガも、近年では誇るべき日本の文化として見直されつつある。勿論、「誌や音楽、演劇などが、人間の情緒を高めるように、マンガは子どもたちの知的な想像力を伸ばし、情操を豊かにするユニークな芸術形式である」(滑川, 1964)のような、マンガの芸術性を評価する意見は少なからず昔から存在していたが、世間一般的には所詮活字離れにつながる俗悪で低級な娯楽という認識が根強く、政府によっても公式に文化として認められていたわけではなかったように、マンガは決して積極的に肯定され認められるものではなかったように思われる。しかし、2000年になってようやくマンガは文部科学省の教育白書によって公式に「日本の文化」であり「重要な現代表現」と位置づけられた。同じ2000年には京都精華大学に日本初のマンガ学科が開設され、2006年には同大学に日本初のマンガ学部が開設されたが、マンガを扱う学部・学科を新設する大学は近年雨後の筍のごとく増加している。このような動きもマンガが実際に大学で学問的研究対象として本格的に扱われるべき時期が到来したことを示唆していると言えよう。

(2) なぜマンガか？

心理的な影響

マンガは実写と違って非常に自由度の高いストーリー設定や人物設定が可能であるため、実に多様な“世界観”や“生き様”を描き出すことができる。ドラマチックなストーリーや個性豊かな登場人物たちは、少年・少女から大人まで幅広い世代を魅了してきた。マンガを読むことが基本的には娯楽や暇つぶしであるとしても、人はマンガを読むことでそこから何かしら読み取り、価値観や行動様式において影響を受けていると思われる。マンガの影響については、過去何度か国内外で大きな議論が行われているし、マンガがもたらす心理的な影響については誰も異存がないだろう⁶。しかし、そのようなマンガの影響を客観的に実証することは容易ではない。人はマンガを読んで何を得ているのか、そのようなマンガから受ける影響(マンガに触れることによる自己変容)を研究対象として成立しうる研究とはどのようなものか、議論する必要があるのである⁷。特に、人がマンガから影響を受ける心理メカニズムについては、心理学が中心となって実証的に研究する必要がある。

マンガを取り上げるメリット

宮原(2001)は、マンガが映画や小説と同様「社会に大量にばらまかれた知的刺激の一部」であり、研究対象として「何ら特別のものではない」ことを認めた上で、尚、マンガを取り上げるメリットを3つ示している。1つ目は、「日常生活に密着した身近なメディアであり、同一場面

を他人とシェアしやすく、コミュニケーション能力が高い」ことである。これは画像情報だけの美術、文字情報だけの文学に比べてマンガの具象性が格段に高いこと、および、マンガの発表形態が雑誌の連載形式であることに一因があると説明がなされている。2つ目は、「マンガが社会的・知的に権威づけられていない」ことである。これはマンガが基本的に娯楽商品であることと関連しており、結果として、マンガは社会常識や道徳に囚われず自由に破天荒な発想を表現しやすくなると説明がなされている。また、社会的・知的に権威づけられていないことが、読者の読みを制限しないという点についても触れている。3つ目は、「疲れている時、物事に興味が湧かない時でも、マンガなら楽しめる」こと、および、「自分のペースで行きつ戻りつ読むことができる」ことである。受身の気楽な体験であることの重要性が指摘されている。マンガが他メディアにはない特徴を有することは、そこに特有な人間の心理的現象を見出せる可能性があることを意味しており、心理学が取り上げる意義は少なくない。

マンガの特殊性

マンガを取り上げるメリットは、マンガの特殊性と結びついている。桂（1950）は、マンガに人気がある理由として、「安易性」（気易く読める）、「映画性」（絵を本体としているので最初から像が与えられている）、「表現の誇張性」（大切なところに力を入れて表現するから見る人の目にハッキリした印象を残す）、「ユーモア性」（人はこの世界に入ることによって、ホッと一息入ることができる）を挙げている。勿論、当時のマンガと現在のマンガは様々な面で異なるが、桂（1950）の挙げた4つの「マンガの特殊性」と宮原（2001）の挙げた3つの「マンガを取り上げるメリット」には共通性がある。また、基本的に内容がフィクションであるため、実写の限界を超える多彩な人物・物語の設定・描写が可能であり、実に多彩な作品が存在することも重要であろう。これらを踏まえて整理してみると、マンガの特殊性は主として次の4点にまとめることができると考えられる。すなわち、①絵と文字からなる複合メディアであること（独特の表現形式を持っていること）、②大衆的で広く普及していること（権威づけられていないので読みが自由であること）、③紙媒体の娯楽品であること（自分のペースで読める、かつ、疲れている時でも気楽に読めること）、④フィクションであること（人物・物語の設定・描写の自由度が高いこと）、の4点である。それぞれ「表現性（可視・可読性）」、「大衆性」、「易読性」、「空想性」と呼ぶことができるだろう。このようなマンガの特殊性が人間の心理に影響を与えやすい要因としても考えられるが、これらの仮説を実証的に検討したり、マンガの影響について心理学的な説明モデルを提示したりしていくことも心理学の役割である。

2. 概観

マンガと心理をキーワードに検索して得られる論文について概観する⁸。まず、学術論文誌に掲載された研究論文ではなく一般向けに書かれた雑誌記事論文（研究論文と区別して以後「論考」と呼ぶ）について概観する。本稿は前者のレビューを当初の目的としていたが、先行する論考が少なからず既存の研究論文の流れと関連しており、今後の研究論文の展望に有用だと判断したからである。また、心理学におけるマンガに関する研究を概観する前に、心理学以外の領域における既存の論考（マンガの影響に関する論考）についても、ごく簡単に触れておく。

(1)「マンガの影響」に関する論考

既存のマンガ研究は、マンガに関する雑誌記事も含めて考えれば、膨大に存在する。マンガは心理学以外にも社会学、文学、教育学、言語学、宗教学といった様々な学問領域で取り上げられているし、芸術論、記号論、表現論、マス・コミュニケーション（マス・メディア）論、産業論、などにも登場する。それぞれの領域におけるレビューは各領域の専門家に任せるとして、ここでは主にマンガと心理に関する論考を取り上げ、マンガの影響がどのように論じられてきたのかを把握することを目的としたい。尚、過去の論考においては「マンガ」というカタカナ表記と「漫画」という漢字表記が厳密な区別なく同一雑誌に両方が併存していたので、以降2つの小節においてのみ「マンガ」というカタカナ表記に漢字表記の「漫画」を括弧づけで併記する⁹。

子どもへの悪影響という視座

概観すると、マンガ（漫画）の影響に関する議論は過去何度か起きている。海外では1940～50年代に、国内では1950～70年代に、マンガ（漫画）が子どもに及ぼす悪影響という内容に関する雑誌記事が多く見られる。当初マンガ（漫画）の読者は子どもが中心だったので、子どもへの（悪）影響が議論の中心であった。マンガ（漫画）の悪影響として挙げられていたのは、「少年非行に及ぼす影響」と「本を読まなくなること」（活字離れ）が中心であった。また、教育上よろしくない表現・内容が含まれている（低俗・残酷・破廉恥なものが子どもに悪い影響を及ぼしては困る）ということもマスコミによって盛んに煽られ、マンガ（漫画）に関する議論の隆盛に影響した。マンガ（漫画）の影響に関する論考の大半は、子どもへのネガティブな影響についてであり、ポジティブな影響や大人への影響についての言及や実証的研究はほとんど見られなかった。

マンガを与えるという視座

『児童心理』（金子書房）において、1964年3月号では「漫画と子ども」、1973年9月号では「マンガの読み方・読ませ方」というタイトルで特集が組まれている。もともと教育的な色強い雑誌であることもあるが、「指導」という言葉が多用されている。例えば、「マンガから読書指導へ」（滑川、1964；阪本、1973）、「家庭における漫画指導」（石黒、1964；今村、1973）、「マンガに対する教師の受け止め方とその指導」（田宮、1973）、といった具合である。他にも「漫画の指導」に関する論考は数多く存在する（e.g.黒澤、1964；森、1973；藤井、1978）し、「読ませ方」についての論考も多く見られる（e.g.亀村、1964；佐藤、1965；石森・佐藤、1973）。1961年に一足早く『読書科学』においてマンガ（漫画）研究に関する特集が組まれていたこともあったせいか、読書科学の知見を応用したり、マンガ（漫画）から読書へつなげようとしたりする論考（e.g.清水、1964）が多く見られた。一方で、早い段階からマンガ（漫画）から読書へ段階的に指導するという安易な考え方に注意を呼びかける論考（e.g.黒沢、1964；浜田、1973）も存在していた。また、1970年代の終わり頃から、マンガ（漫画）作品の中に見られる人物像や人間関係の検討といった論考（e.g.石子、1977；梶井、1977）が見られるようになった。

マンガの影響に関する過去の論考を俯瞰した結果、①マンガ（漫画）の影響のうちネガティブな影響ばかりが偏って取り上げられていたこと、②影響の受け手として子どもにばかり焦点が当てられていたこと、③読書科学と関連して教育心理学的な立場からの論考が多かったこと、が特徴づけられた。これらは当時子ども観・教育観と多分に関連していると思われる。マンガ（漫画）の影響に関する数多くの論考も、その目的は「子どもたちの人間性の形成に与えるマイナス

の影響を明らかにし、それを防止する道を探る」(副田, 1973) ことにあり、人格形成へのポジティブな影響に対して大々的に取り上げて積極的に主張する論考は近年までほとんど見られなかった。

(2) 心理学的論考

マンガに関する論考において初めて論題に「心理学」という語を銘打った論考は、おそらく磯貝(1964)の「漫画の心理学」ではないかと思われるが、そこでは社会心理、視覚心理、発達心理、教育心理の観点からマンガに対して考察が為されている。この論考は先に述べた『児童心理』の特集における記事で、学会誌に掲載された研究論文でもなければ、実験や調査が行われているわけでもないが、様々な心理学領域の観点からマンガを考察した最初の論考として価値がある。しかし、今後の心理学におけるマンガに関する研究の展望までは積極的に論じていなかった。

具体的な調査結果と研究の展望に関する論考としては、大内(1954)によるWolf&Fiske(1949)の研究紹介「漫画ファンの分析」が注目に値する。読者である児童を対象に面接を行うという手法で、読者側からマンガの影響を質的に捉えようとした研究の紹介があったこと(にも拘らず、そのような研究があまり発展してこなかったこと)は興味深い。一連の研究報告の中でも特に、マンガに対する興味の程度から読み手を3分類し、「漫画ファン」や「普通読者」といったカテゴリーを設定して読者タイプ別に考察を加えている点は、マンガの影響を検討する上で非常に重要である。日本におけるマンガの影響に関する論考は、臨床心理学の事例に関するものを除き、往々にして一般論化されたものが多く、読者側の個別具体的な文脈といった視点があまり考慮されてこなかったように思われることを鑑みても、この先行研究の手法は参考に値する。

また、河合(1987)は青年期の感性和ユングの概念を関連させながらマンガについて考察している。例えば、ユングのいう内向的感覚機能を引き合いに出しながら、幾つかのマンガ作品はマンガ家が自分の内界を感覚的にとらえて表現したものであり、それ故に読み手が(非現実・非存在を感じさせるはずの)創作されたマンガ作品の中にリアルさを感じとってしまうと考察しているが、他にもユングの理論を用いて、人がマンガに影響を受けやすいことに対する心理学的説明を試みている。

(3) 心理学論文

肝心の学会誌や紀要に掲載された研究論文であるが、数は非常に少なかった。それらが属する主要な心理学領域も考慮しつつ、今現在どのような研究が行われているのか概観し、まとめた。その結果、学会誌論文や紀要論文としては、教育心理学と認知心理学の領域に属する研究が最も多く、全体としては大きく3つの研究動向があることがわかった。

マンガを学習教材として扱う研究(教育心理学領域)

教育心理学的な視座から、マンガを学習教材として子どもの教育に役立てようとする方向性の研究が多く見られた。具体的には、マンガが文章読解や記憶に及ぼす影響を検討したり、マンガ教材と文章教材で記憶成績を比較したりする研究が見られた(e.g.向後, 1993, 1994; 佐藤, 1996, 1998; 中村・白井, 2001)。例えば、マンガ教材が学習動機を高め理解促進につながる可能性がある(向後・向後, 1998)が、単に説明文をマンガに直しても学習効果が望めない(白井,

2002), などの知見が得られている。文章理解とは異なるマンガ独自の読解過程を想定した上で、マンガそのものの読解力について検討する研究も見られた (e.g. 中澤・中澤, 1993; 中澤・望月, 1995; 中澤, 2004, 2005)。マンガ独自の読みを想定する研究は、以下に述べる認知的な研究へと発展している。

マンガの読みに関する研究 (認知心理学領域)

認知心理学的な視座から、マンガの「読み」や「表現形式」に焦点を当て、そこにおける心的メカニズムの解明を目的とした研究が近年増えている。そこにおいては、眼球運動の測定 (中澤, 2002; 石井・井垣・倉田・大森・増田, 2004; 井垣・石井・大森・倉田・増田, 2005), コマ分類手法 (倉田, 2003), レイヤー分解 (雨宮・住山・増田, 2002) など実に様々な手法を用いて分析が行われている。例えば、倉田 (2003) は、マンガを構成要素に分解し、マンガを「記号の集大成としてのマンガ」として捉え、複数人で同一マンガ作品の分解を行ったときに異なる結果が生じる現象について考察している。これら認知に関する研究は科研や21COEに関わる研究も多く、心理学におけるマンガに関する研究の中で現在最も勢いがあり、中心的な位置を占めている。

思春期心性に関連させた研究 (臨床心理学領域)

臨床心理学的な視座から、特定のマンガ作品を通して思春期心性を考察したり事例に対する理解を深めたりしたことを報告する研究が幾つか見られた。例えば、西村 (2004) は、特定の少女漫画『天使禁猟区』と思春期女子の深層心理の関連を考察することで、事例に対する理解を深めたことを報告している。また、高見 (2004) は、クライアントが特定のマンガの主人公に自身を同一化することで自らの多動性・攻撃性・衝動性を制御しようとしていた事例を報告している。この他にも特定のマンガ作品から思春期体験を考察したもの (岩宮, 2003) や、遊戯療法においてマンガをきっかけにコミュニケーションが発展していった事例の報告 (山崎, 2002) などが見られた。このような臨床心理学的研究論文は近年増加傾向にあり、今後の発展が期待される。

その他 (社会心理学領域など)

上記に挙げた主たる3つの研究動向以外のものとしては、認知心理学や社会心理学の領域で、題材・刺激にマンガが登場する研究 (林, 1978; 今城, 1984) や、マンガ上に見られる表現をカウントする計量的研究 (川浦, 1977; 豊田・福富・西田, 1993) などが幾つか見られた。刺激材料としてのマンガを扱う研究は、基本的に従来の研究における実験デザインに則った研究であり、先行研究との比較に焦点が当てられていた。また、マス・メディアとしてのマンガを扱う研究では、そこにおける情報量に焦点が当てられていた。これらの研究についても、更なる研究の蓄積が必要である。

今回の分類は現時点における大まかな研究動向を把握するためのイメージ・マップに過ぎず、今後の研究、あるいは、心理学的手法を用いているが今回の検索から漏れてしまった学会誌論文や紀要論文などを加えて常に更新していく必要がある。

3. 展望

(1) 具体的な研究の方向性に関する提言

心理学におけるマンガに関する研究の中でもまだ研究の数が少ない研究例、出現が待たれる研究例など、幾つか研究の方向性について具体的に提言する。

マンガのポジティブな影響に焦点を当てた研究を

再三述べてきたように、マンガの影響についての過去の議論は、子どもに対する悪影響が中心であり、マンガの影響のうちネガティブなものに焦点が偏っていた。マンガのポジティブな影響についても、もっと積極的に取り上げるべきであろう。現代では、多種多様なストーリーマンガが存在し、名作と言われたりドラマ化・映画化されて全国的に大ヒットしたりするマンガ作品も数多く存在する。「大切なことはマンガから教わった」というweb上のコミュニティに1万8千人以上の人間が所属し、マンガから受けたポジティブな影響について語り合っているという現実もある¹⁰。2万人弱がマンガからのポジティブな影響を肯定し、積極的に発信したり共有したりしているという実情がある現在、マンガのポジティブな影響に対して、もっと積極的に焦点を当てた研究も必要である。

自己形成と関連する研究を

現代日本において、青少年は幼少期からマンガに接する機会が多い。子どもの頃からマンガに慣れ親しみ、数多くのマンガを読んで育った者にとって、マンガは単なる娯楽ではなく、自己形成に大きな影響を与えたものとして位置づけられている可能性も考えられる。実際、理想・生き方に影響を与えた人物のうち、身近な人物以外では、マンガ・アニメの登場人物が最も多く挙げられたという調査報告もある（大野，1995；家島，2006）。齋藤(2003)が、「日本の子どもは、スポーツマンガを通して自己形成のモデルを獲得していったケースが少なくない」、「私自身、主人公がだんだんと実力を上げていくプロセスに魅力を感じ、影響を受けてきた」、「現在の生き方や仕事のスタイルにも、それが影響している」と述べるように、現代日本人の自己形成にマンガが影響を与えている可能性は少なくない。夏目(2006)が指摘するように、マンガに人生を学んだと公言する者も少なくない。マンガを読んで特定のスポーツを始めたり、特定の職業を志したりすることも現代では珍しくないだろう。しかしながら、心理学においてマンガと自己形成に焦点を当てた研究は、まだ数が少なく、今後の実証的な研究が期待されるところである。

読者の側からマンガの影響を検討する研究を

マンガを読むという行為は、基本的に誰かに強制されるものではなく、自主的な行動である。故に、特に意識的に網羅しようと思っていない限り、数多くのマンガの中から自分に合いそうな作品、自分が好きそうな作品を選びとっているはずである。そのようにマンガを読むことを内発的に動機づけられ、数あるマンガの中から特定のマンガを選択的に読んでいる人々が、自らの行為をどのように意味づけているのか、読者の側から調査することも必要である。特定の作品批評は数多くあるが、特定の作品に対して万人が同じ反応を示すわけではない。人がマンガに対して何を求め、実際に何を得ているのか、読者の視点からボトムアップ的に研究していくことも重要であるように思われる。マンガの側からではなく、人間（の心理）の側から迫るというアプローチは、心理学に特徴的なアプローチである。

ナラティブという視点の導入を

これまでの認知的な研究で取り上げられてきたマンガは「メディアとしてのマンガ」であり、その独特な「表現形式」が着目されていた。現代における人気マンガの大半はストーリーマンガ

であることから、着目するポイントを「表現形式」から「物語（ナラティブ）」に変えてみると、また違った研究の可能性が見えてくるであろう。すなわち、マンガを「物語としてのマンガ」として取り上げ、実写では表現できない空想的でドラマチックな「物語（ナラティブ）」に着目した研究の可能性も考えられる。Gergen&Gergen（1983）は、「他者の物語を自己の物語に組み込む」という捉え方を示し、物語（ナラティブ）という視点の重要性を指摘している。「自己」と「マンガ」を共にナラティブ構造を持つものとして捉えると、マンガの影響は「物語（ナラティブ）」を媒介としていえることができる。すなわち、マンガから影響を受けたということは、個人の物語論的視座に影響を受けたということを意味しており、「マンガから自己を捉える際の視点（ナラティブの枠組み）を獲得した」と捉えることができるだろう。臨床事例において、クライアントがマンガを通して自己の内面にある語りえないものを語ろうとする例など、まさにマンガから得たナラティブ枠組みを使って自己を物語ろうとしている行為にはほかならない。ナラティブの視点からマンガの影響を検討する研究は、心理学におけるマンガに関する研究に新たな可能性を提供することが予想される。

（2）心理学におけるマンガに関する研究の発展に向けて

将来の心理学におけるマンガに関する研究の発展に向けて、目下必要であると考えられる課題や今後の方向性を幾つか提言する。

研究の蓄積を

心理学において、マンガに関する研究は、まだまだ数が少ない。研究の絶対数を増やすことも必要である。マンガに関する研究に関して言えば、心理学は社会学に立ち遅れていると言わざるを得ない。勿論、心理学においてもマンガに関する研究は着実に蓄積されているが、研究論文の数で言えば、決して多いとは言えないのが現状である。また、現時点では、心理学におけるマンガに関する研究は認知心理学や教育心理学の領域に偏っているが、マンガに関する研究ができる心理学の専門領域は他にもある。心理学におけるマンガに関する研究は、レビューしてきた先行研究以外にも色々考えられるし、無限の可能性を秘めている。心理学においてマンガに関する多様な研究が出現し、蓄積されていくことが望まれる。

質の高い研究を

当然のことであるが、量的な増加だけでなく、質的な研究水準の向上も求められる。先に述べた研究の蓄積の必要性和重複するが、より質の高い研究の出現のためには、ある程度の研究の量的蓄積も必要である。しかし、質の低い研究が氾濫しても意味がない。「きわめていかがわしいマンガ論が大手をふって横行することになる」（呉，1997）といった状況は回避しなければならない。そのためには、ある程度の研究の蓄積は勿論、質の高い研究の評価基準についての議論が必要である。この問題は後述する「心理学におけるマンガに関する研究のあり方について検討を」という部分と関連するので、詳述は後に譲る。

他の学問領域と連携を

マンガに関する論考は数多く存在する。心理学における研究論文こそ数は少ないが、マンガ（あるいは漫画）に関する雑誌記事は膨大である。ある個別の作品についての評論やマンガ史研究がダイレクトに心理学における研究の役に立つとは限らないが、少なくとも心理学においてマ

マンガに関する研究を行う上で、他の学問領域におけるマンガに関する研究が多少なりとも貢献してくれる可能性は低くない。また、心理学におけるマンガに関する研究が、他分野におけるマンガ論考に貢献する可能性も低くない。他の学問領域に数多く散在するマンガに関する研究まで含めてレビューすることは容易ではないが、マンガを当該領域でどう位置づけるのかについては、近年、各学問領域の学会で議論がなされている。例えば、「心理学とマンガ研究」（2004年、日本心理学会）、「社会学とマンガ研究」（2005年、日本社会学会）、「マス・コミュニケーション論、マスメディア論とマンガ研究」（2006年、日本マス・コミュニケーション学会）などがその例である。マンガ学の見地からすれば、各学問領域が相互に連携をとりながらマンガに関する研究を進めていくことが望まれる。日本マンガ学会が設立され、学会誌『マンガ研究』が創刊されたことによって様々なジャンルの研究が一堂に会する機会も増えたが、もっと学問領域横断的なマンガ研究プロジェクトなどがあってよい。今後はそういった他の学問領域との連携も必要であろう。

心理学におけるマンガに関する研究のあり方について検討を

「研究の量を増やし、研究の質を向上させ、他の学問領域と連携を図る」というのは、聞こえは良いが実際は非常に難しい。しかし、幸か不幸か、心理学においてはマンガに関する研究が、まだそれほど多くないため、質の低い研究が跳梁跋扈する前に対処が可能である。今、心理学におけるマンガに関する研究のあり方について検討しておくことは、後の優れた研究の輩出につながる。質の高い研究を百花繚乱させんとするならば、今、この時点で、心理学におけるマンガに関する研究について改めて検討しておく必要がある。マンガ研究において心理学が果たす役割、あるいは、心理学が担うべき問題の選定が重要である。そしてそれは、「心理学研究とは何か」という問いにつながり、人文科学における心理学のアイデンティティをも再考することにもなるだろう。他の学問領域との交流の中で心理学としての研究のあり方や、質の高い研究について模索し、どのような研究が心理学におけるマンガに関する研究として典型になり得るのかを検討する必要があるだろう。

おわりに

これまで（日本の）「心理学におけるマンガに関する研究」を概観し、展望を述べてきた。最後に「心理学におけるマンガに関する研究」の進化形として「マンガ心理学」なるものを提唱することで、まとめて代えさせていただくことにする¹¹。

マンガ心理学の提唱

心理学におけるマンガに関する研究とは、単にマンガを刺激材料に使えばそれでいいというものではないし、既存の心理学研究で明らかになっている知見をマンガで見出すことでもない。これまで「心理学におけるマンガ研究」でも「マンガに関する心理学研究」でもなく、「心理学におけるマンガに関する研究」という長い書き方をしてきたのには、理由がある。後者が前者2つを包括するというのも理由の1つであるが、要は、マンガと心理学のコラボレーションの可能性を制限したくなかったからである。単に、マンガ研究で既に明らかになっていることを心理学で（再）検証するだけ、あるいは、心理学で既に明らかになっていることをマンガで（再）検証するだけの研究で、新たな知見が得られないのであれば、研究の意義は少ない。意義ある研究にす

るために、マンガと心理学のコラボレーションのあり方について学問領域横断的な視点で検討する必要がある。そうしてでできあがったマンガと心理学のコラボレーションのカタチを「マンガ心理学」と名づけたい。

マンガ心理学とは、安易にマンガ「で」心理学することでもなく、単純にマンガ「を」心理学することでもない。すなわち、マンガ心理学におけるマンガは、単なる刺激・材料や、単なる研究対象ではない。マンガ心理学は、マンガに関連して生じる人間の心理学的現象すべてを射程としながら、マンガ学と心理学のどちらにも有益な知見を還元できるような研究を目指すものである。そのあり方については今後も議論を重ねていく必要があるが、本稿がマンガ心理学の発展の一助となれば幸いである。

謝辞

本稿の作成に当たり、京都大学大学院教育学研究科教授やまだようこ先生に建設的なコメントを賜りました。深く感謝し、お礼申し上げます。

注

- 1 有識者もマンガを読む時代になったと言える。例えば、外務大臣の麻生太郎は政界有数のマンガ通として知られている。また、東京大学名誉教授でもある養老孟司が『マンガをもっと読みなさい』といったタイトルの書籍を出版したり、2006年秋に開館した京都国際マンガミュージアムの初代館長を務めたりしている。
- 2 例えば、最近のもので言えば、2006年8月27日には、マンガを通して日中の高校生が交流する「日中交流漫画展」（外務省主催）が行われている。また、2003年3月（10日～16日）には、日本ASEAN交流年を記念して「国際アニメ・マンガフォーラム」（文化庁とASEAN諸国在京大使館主催）が開催されている。規模の大小はあるが、この他にもマンガを媒介とした交流事業は少なくない。
- 3 例えば、2000年以降では、日本心理学会第68回大会（2004）ワークショップ「心理学とマンガ研究」（WS77）、日本心理学会第69回大会（2005）シンポジウム「メディアとしてのマンガ ―いかに読ませるか、どう読むか―」（S06）などが挙げられる。これらにおいては、「表現形式」や「情報メディアとしての機能」に焦点が当てられていた。
- 4 マンガの発展の歴史については、呉（1997）や清水（1999）といったマンガ評論やマンガ史研究を参照すると概略がつかめる。本稿の目的は、あくまでも心理学における研究論文（主に学会誌論文や紀要論文）をレビューすることである。マンガ評論やマンガ史を中心としたマンガ研究のレビューについては、竹内（2004）などが参考になる。
- 5 本稿では「漫画」と「マンガ」に厳密な区別をつけず、基本的に「マンガ」という表記を採用する。マンガと呼ばれる表現形式には様々なジャンルのものがあるが、現代において最も普及しているのはストーリーマンガである。また、ストーリーマンガにおいてもそのテーマは多種多様かつ複合的で、容易に分類・ジャンル分けすることはできない。例えば、恋愛、スポーツ、根性、友情といった複数のテーマが1つの作品に盛り込まれている場合、その作品を安易に「恋愛マンガ」とか「スポーツマンガ」とか呼べないが、現代におけるストーリーマンガはそうした多様なテーマが織り込まれた作品であることが多い。
- 6 ただし、過去の議論はマンガのネガティブな影響から出発した議論であり、基本的なテーゼは「子どもに対するマンガの悪影響にどう対処するか」であったことには注意が必要である。すなわち、過去の「マンガの影響」についての議論の多くは、マイナスの影響、子どもへの影響に偏っており、プラスの影響や大人への影響についてはあまり積極的に論じられてこなかった。また、子どもへの悪影響という考え方も実証的なデータよりも当時の道徳観や教育理念が先行していたように見受け

- られる。
- 7 日本発達心理学会第17回大会（2006）ラウンドテーブル「マンガと自己：人はマンガから何を学びとっているのか？マンガからの影響をいかに研究するのか？」（R12）では、人物とストーリーに焦点を当ててマンガの影響を検討する研究の可能性などについて討論が行われた。また、2006年11月には、日本心理学会第70回大会（2006）ワークショップ「マンガと心理学のコラボレーション：マンガ心理学の可能性を考える」（WS010）という企画も予定されている。夏目（2006）は『マンガに人生を学んで何が悪い？』という著書の中で、マンガがいかにして人生を語りうるようになったかをマンガの側から考察しているが、非常に参考になる。マンガの影響を研究しようとするなら必読である。
 - 8 本稿作成に際して使用した検索サービスは、GeNii（NII学術コンテンツ・ポータル）の総合検索システム、NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）、PsycINFOである。主な検索キーワードは「マンガ」、「漫画」、「まんが」、「コミック」、「心理」、「manga」、「comic(s)」、「cartoon(s)」などである。本稿では「マンガor漫画orまんがorコミックand心理」の検索結果を中心に国内における研究論文と論考をまとめた。当然ながら、キーワード検索から漏れた研究の中に、マンガに対して心理学的手法を用いた研究が含まれている可能性は低くなく、今回のレビューによって既存の「心理学におけるマンガに関する研究」全てを網羅したとは思っていない。また、海外の先行研究については、膨大な先行研究数、紙面の都合、国内マンガと海外マンガの質的差異などの諸事情により、本稿では掲載できなかった。また改めて別の場で発表する予定である。
 - 9 過去の論考において、漢字の表記（漫画）とカタカナの表記（マンガ）は混在しており、特に意識して使い分けられている場合と、そうでない場合があるため、便宜的に「マンガ（漫画）」と表記しておく。竹内（2006）によれば、ストーリーマンガではない「漫画」や絵物語、紙芝居といったストーリーマンガ以前の児童文化は、現代のストーリーマンガと大きく異なる。当時の具体的な児童文化や「漫画」については佐藤（1964）、菅（1964）、石子（1973）などを参照のこと。
 - 10 ソーシャル・ネットワーク・サイトmixiにおけるコミュニティ「大切なことはマンガから教わった」http://mixi.jp/view_community.pl?id=812947の参加者数は18673名（最終確認2006/11/28）であり、現在も着々と参加人数を増やしている。投稿内容を見ると、考え方から実用的なスキルに至るまで、実にいろんな面においてマンガからポジティブな影響を受けていることが見て取れる。
 - 11 マンガ心理学という用語が初めて論文集に掲載されたのは、家島・菅村・中澤の3人による日本心理学会第70回大会（2006）ワークショップ「マンガと心理学のコラボレーション：マンガ心理学の可能性を考える」においてであるが、菅村は話題提供において、（心理学の大半が海外発祥の輸入モノであることを示唆して）「1つくらい日本から世界に先駆けて発信する心理学のジャンルがあってもよい」と述べ、「マンガ心理学＝日本特有の心理学」という観点から、日本が心理学においてマンガを取り上げる意義について言及した。

引用文献

- 雨宮俊彦・住山晋一・増田のぞみ.(2002).マンガ表現の時空（1）—レイヤー分解・少女マンガのコマ・マンガ表現の感性認知記号論—.関西大学『社会学部紀要』,33(2),1 - 191.
- 藤井秀昭.(1978).漫画指導についての一考察.読書科学,21（3・4）75 - 82.
- 副田義也.(1973).子どもにとってのマンガ—少年マンガにおける想像力の問題—.児童心理,27(9),16 - 23.
- Gergen,K.J.&Gergen,M.M.（1983）.Narratives of the self. In Sarbin,T.R.&Scheibe,K.E.（Eds）. *Studies in social identity* (pp.254 - 273) . New York : Praeger.
- 浜田陽太郎.(1973).マンガの教育学—マンガと人間形成—.児童心理,27(9),42 - 49.
- 林文俊.(1978).相貌と性格の仮定された関連性 - 3 - 漫画の登場人物を刺激材料として.名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）,通号25,41 - 55.
- 家島明彦.(2006).理想自己像に影響を与えた人物モデル.京都大学大学院教育学研究科紀要,52,280 - 293.

- 井垣竹晴・石井拓・大森貴秀・倉田敬子・増田直衛.(2005).マンガの読みにおける視線移動の規定因. 慶應義塾大学21世紀COEプログラム「心の解明に向けての統合的方法論構築」平成16年度成果報告書, 207 - 210.
- 今村秀雄.(1973).家庭におけるマンガの指導. 児童心理, 27(9), 67 - 73.
- 今城周造.(1984).情緒経験におよぼすリアクタンスの効果—漫画評価事態における検討. 心理学研究, 55(5), 268 - 274.
- 磯貝芳郎.(1964).漫画の心理学. 児童心理, 18(3), 26 - 35.
- 石黒修.(1964).家庭における漫画指導—母親の漫画恐怖症の克服—. 児童心理, 18(3), 58 - 64.
- 石井拓・井垣竹晴・倉田敬子・大森貴秀・増田直衛.(2004).マンガにおける視線誘導要因の推定と眼球運動の制御. 慶應義塾大学21世紀COEプログラム「心の解明に向けての統合的方法論構築」平成15年度成果報告書, 107 - 113.
- 石子順造.(1973).戦前・戦中・戦後のマンガ表現. 児童心理, 27(9), 102 - 112.
- 石子順造.(1977).子どもマンガに見る父親像. 児童心理, 30(10), 103 - 109.
- 石森章太郎・佐藤忠男.(1973).マンガの魅力と読み方・読ませ方. 児童心理, 27(9), 128 - 145.
- 岩宮恵子.(2003).異能性・異質性の自覚と思春期体験—漫画「ヒカルの碁」からの考察—. 島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要, 1, 25 - 32.
- 梶井純.(1977).人気マンガに見る親子関係の分析. 児童心理, 31(9), 175 - 180.
- 亀村五郎.(1964).漫画の見せ方読ませ方. 児童心理, 18(3), 50 - 57.
- 菅忠道.(1964).週刊児童雑誌を斬る. 児童心理, 18(3), 84 - 89.
- 桂廣介.(1950).児童漫画の再出発. 児童心理, 4(2), 30 - 32.
- 河合隼雄・作田啓一・多田道太郎・津金沢聡広・鶴見俊輔.(1987).『昭和マンガのヒーローたち』. 講談社.
- 川浦康至.(1977).マス・メディアとしてのマンガの表現構造. 年報社会心理学, 171 - 185. 向後千春.(1993).学習マンガにおける学習内容とストーリーの記憶. 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 38.
- 向後千春.(1994).ストーリー部分と学習内容部分へのマンガ挿絵の効果. 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 352.
- 向後智子・向後千春.(1998).マンガによる表現が学習内容の理解と保持に及ぼす効果. 日本教育工学雑誌, 22(2), 87 - 94.
- 倉田敬子.(2003).マンガの読みに見る心的機構—文字と画像の融合的知覚と物語生成. 慶應義塾大学21世紀COEプログラム「心の解明に向けての統合的方法論構築」平成14年度成果報告書, 157 - 162.
- 呉智英.(1997).『現代マンガの全体像』(増補版の文庫本). 双葉文庫.
- 黒沢浩.(1964).漫画の創作と生活指導. 児童心理, 18(3), 65 - 70.
- 宮原浩二郎・荻野昌弘.(2001).『マンガの社会学』. 世界思想社.
- 森しげる.(1973).映像文化としてのマンガ—その受け止め方と指導—. 児童心理, 27(9), 24 - 31.
- 中村光伴・白井裕美子.(2001).児童における学習教材としてのマンガのあり方—授業型マンガとQA型マンガの比較—. 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 164.
- 中澤潤.(2002).マンガ読解過程の分析: マンガ読解力と眼球運動. マンガ研究, 2, 39 - 49.
- 中澤潤.(2004).マンガ読解力の規定因としてのマンガの読みリテラシー. マンガ研究, 5, 6 - 25.
- 中澤潤.(2005).マンガのコマ読みリテラシーの発達. マンガ研究, 7, 6 - 21.
- 中澤潤・望月千恵子.(1995).マンガ読解力が学習マンガの理解に及ぼす効果. 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 369.
- 中澤潤・中澤小百合.(1993).子どもは漫画をどのように理解するのか. 幼年教育研究年報, 15, 35 - 39.
- 滑川道夫.(1964).マンガから読書指導へ. 児童心理, 18(3), 1 - 15.
- 夏目房之介.(2006).『マンガに人生を学んで何が悪い?』. ランダムハウス講談社.
- 西村則昭.(2004).少女漫画『天使禁猟区』と思春期女子の心理臨床. 心理臨床学研究, 22(2), 105 - 106.
- 大野道夫.(1995).「望む—生き方のモデル」の現在. 児童心理, 49(12), 127 - 130.
- 大内茂男.(1954).漫画ファンの分析. 児童心理, 8(8), 64 - 73.

- 齋藤孝.(2003).『スポーツマンガの身体』.文藝春秋.
- 阪本一郎.(1973).マンガの読み方・読ませ方—マンガから読書指導へ—. *児童心理*,27(9),50 - 59.
- 佐藤公代.(1996).学習漫画理解に及ぼす「漫画表現」の役割. *日本教育心理学会第38回総会発表論文集*,416.
- 佐藤公代.(1998).文章の読解・記憶に及ぼす漫画の役割. *日本教育心理学会第40回総会発表論文集*,112.
- 佐藤忠男.(1965).マンガの与え方・読ませ方. *児童心理*,19(8),132 - 137.
- 佐藤毅.(1964).児童文化と漫画—「漫画」の疎外と「漫画」の回復. *児童心理*,18(3),36 - 43.
- 清水勲.(1999).『図説 漫画の歴史』.河出書房新社.
- 清水照行.(1964).週刊誌より読書指導への導入—実践記録—. *児童心理*,18(3),95 - 101.
- 白井裕美子.(2002).学習教材としてのマンガのあり方—挿入質問の効果と説明文マンガ化の意義—. *日本教育心理学会第44回総会発表論文集*,356.
- 高見友理.(2004).クライアントの「内なる火」に関する一考察—漫画「烈火の炎」から—. *島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要*,2,25 - 35.
- 竹内一郎.(2006).『手塚治虫＝ストーリーマンガの起源』.講談社.
- 竹内オサム.(2004).『マンガの批評と研究+資料〈改訂版〉』(私家版).
- 田宮武.(1973).マンガに対する教師の受け止め方と指導. *児童心理*,27(9),60 - 66.
- 豊田秀樹・福富護・西田智男.(1993).マスメディアにおける女性表現の単一次元性—雑誌メディアにおけるマンガとグラビアの分析. *社会心理学研究*,8(1),1 - 8.
- 山崎篤.(2002).プレイセラピーにおける一人遊びの取り扱いについて—自閉的にマンガを読み続ける少年との導入期の経過から—. *精神分析研究*,46(4),423 - 429.
- 柳内達雄.(1964).いいマンガ・わるいマンガの条件—漫画の教育学. *児童心理*,18(3),44 - 49.
- 養老孟司・牧野圭一.(2005).『マンガをもっと読みなさい』.晃洋書房.
- 全国出版協会出版科学研究所.(2006).『2006出版指標年報』.全国出版協会出版科学研究所.

(教育方法学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2006年9月8日、改稿2006年11月28日、受理2006年12月7日)

The Review and Perspective of the Study on Manga in Psychology

IESHIMA Akihiko

The purpose of this paper was to grasp the history of the study about manga (Japanese comics) in psychology and to consider its possibilities and prospects. First, I discuss manga and its four distinctions: (1) visibility (it is composed of unique symbols and sentences); (2) popularity (=it is very popular in Japan not only among children but also among adults); (3) communicability (it is very easy to read); (4) fictionality (the stories are fiction). Next, I reviewed and introduced old studies about manga in psychology. The main focus of these studies had been their bad influence on children. It meant that we must focus on the good influence of manga and its influence on adults. The main studies about it in psychology have been on educational, cognitive, and clinical psychology. Third, I thought about the possibility of a new study of manga in psychology and about its prospects. I enumerated some research examples that might be possible, suggesting the term "manga psychology".